

草刈る呼倫貝爾序説 —— 中国東北部のエウエンキ調査より ——

井上 紘一

1986 年春以来、われわれは「中国東北部の文化複合 —— 満族文化の周辺諸民族に及ぼした影響」というテーマを掲げて国立民族学博物館で共同研究を進めている。これは、当該領域における従来の研究成果を総括するとともに、漸く機が熟してきた現地調査を通じてその実態を解明し、かくして「中国東北部の文化複合」を立体的に掌握することを目的としている。また、この共同研究は、東洋史・宗教学・言語学・民族学の専門家によって推進されており、文化複合を追求するに適しい学際的プロジェクトでもある。

このプロジェクトの一環として、同年の夏には、私と2人の同僚（畑中幸子、金連紘）が中部大学の海外学術調査の研究費を得て訪中し、内蒙古自治区のエウエンキ（鄂温克）族自治旗、オロチョン（鄂倫春）族自治旗、モリンドワ（莫力達瓦）・ダウル（達斡爾）族自治旗を踏査している。この旅行では、フィールド・ワークの可能性を打診するとともに、可能の場合は各自の調査地を設定することも目的としていた。

同年秋からは、トヨタ財団の研究助成を受けて「満族文化の周辺諸民族に及ぼした影響」と題する日中共同研究が開始された。具体的には、上記の中部大学の3人と中国の満族文化研究者3人がそれぞれ自前のテーマを追求し、独自にフィールド・ワークを実施しながらも、研究集会において相互に成果と意見を交流することで所期の目的を達成してゆく運びとなった。自然の成りゆきとして、中国側（金を含む）が満族を、日本側は周辺

諸民族を分担することとなり、地の利を得た在中国の共同研究者は直ちに
実地調査を始めている。

私は久しくシベリアのエウエンキ研究に携わってきた関係上、何の躊躇
いもなく、同系の民族であるエウエンキとオロチョンを担当することにし
た。シベリアは外国人のフィールド・ワークを峻拒しているため、専攻す
る民族との出会いに対する私の渴望は、ほとんど絶望に変わりかけていた。
従って、エウエンキ、オロチョンの実地調査の可能性が仄見えてきた時に
は、躊躇がないどころか、実をいうと、欣喜雀躍の内心を隠すのにかなり
苦労したものである。

かくて1987年夏、私は勇んで訪中の途についた。今回は、トヨタ財団の
助成に加えて、中部大学海外学術調査の研究費も引き続き得られたので、調
査期間は前年の2倍の2カ月を確保することができた。本稿は、この時の
フィールドからの報告である。尚、やや待ち過ぎの感がある私のフィール
ド体験を財政的に支えてくれたトヨタ財団と中部大学に対して、並びに、
私の研究を物心両面で支援してくれた共同研究の仲間に対しては、この場
を借りて心からの謝意を表したい。また、以下に氏名を明記する方々のみ
ならず、今回のフィールド・ワークに協力を惜しまれなかった中国の方々、
何よりもまずインフォーマント各位に対しても、厚くお礼申し上げる次第
である。

今回の調査対象は、エウエンキ一本に絞ることにした。それは、オロチョ
ン自治旗の調査許可が得られなかったためでもあるが、今夏フィールド・
ワークの実施できたエウエンキ自治旗および陳巴爾虎旗のエウエンキ調査
だけでも、予定した時間では不足気味だったから、結果的には正しい判断
であったと考えている。さらには、トナカイ飼育に従事する狩猟民で、ヤ
クート（雅庫特）と称されるエウエンキの一集団も、その在住する額爾古
納左旗への旅行許可証が入手できなかったため訪問が叶わず、オロチョン
ともども来年度以降の調査の宿題である。最後に記した2集団が狩猟民で

あるのに対し、今回訪れたエウエンキ自治旗のソロン（索倫）と陣巴爾虎旗のトングス（通古斯）の2集団は、基本的に草原の民であるから、今年度の調査は、図らずも、牧畜民のみを対象とする結果になった。ところで、エウエンキに関する限り、昨年 の踏査行ではエウエンキ自治旗の旗政府所在地である南屯を訪ねただけであり、以下に記すような、各地に散在するエウエンキ集落（ソム〔索木〕あるいはシャン〔郷〕と呼ばれ、行政村に相当）へ足を踏み入れたのは、今年が初めてである。

私の担当するエウエンキとオロチョンは、ともに北方ツングースに属することが知られるが、研究の現段階ではその実態や両民族の関係、さらには両者とそのソ連の同族、即ち、エウエンキ、エウエン、ネギダルとの関係についても、必ずしも明らかではない。このような実情に鑑み、せめてエウエンキだけでも、できるだけ多くの集落を踏査することを、まずは自らに課すことにした。これは即ち、いわゆる予備調査と称すべきものである。今回、私は特に「人間と動物の関係」を研究テーマに掲げた。エウエンキであれ、オロチョンであれ、牧畜や狩猟を生業とする民族にとっては、これが最も根源的な関係であるからである。ただし、今回の予備調査は、かかる課題研究に端緒を開いたことをもって成果とするのが至当であって、「人間と動物の関係」というテーマは、大枠として、今後とも私の追求すべき課題である。

* * *

中国のエウエンキ民族は、1958年にエウエンキ自治旗の形で行政的に組織された、比較的若い集団である。それまではソロン、トングス、ヤクートと称されていた3集団が、その前年、「エウエンキ」という自称を共有する故をもって、「当事者の決議」に基づき、単一の民族として公認されるに至ったのである。それ故、民族としての糾合度も比較的弱く、3集団は自称

並びに他称において、いまだにソロン・エウエンキ、トンクス・エウエンキ、ヤクート・エウエンキという呼称を用いる傾向が認められる。

これら3集団は、その起源を一にするとはいえ、清朝初めに清国へ服属して、辺境駐防の兵士としてホロンバイル（呼倫貝爾）草原へ派遣されたソロン、また約1世紀前にレナ流域（ヤクート地方）からトナカイ群を追って南下してきたヤクート、さらにロシア革命に際してザバイカル地方から避難してきたトンクスというように、その歴史的背景を全く異にしている。それ故、エウエンキ民族としての糾合には、なおかなりの時間を要するものと思われる。従って、エウエンキのもとでは、民族の生成過程を観察するという、きわめて稀有な機会にも、われわれは恵まれている訳である。

まず、エウエンキとオロチョンの関係について触れておく。言語学的には、両者がシベリアのエウエンキ、エウエン、ネギダルとともに北方ツングース語派を構成し、満州語を代表とする南方ツングース語派に対置されるところなのが定説であり、また民族学の世界でも、狭義の「ツングース」といえば、上記の北方ツングース諸族を指すのが通例である。だが同じく北方ツングース語派に属するとはいえ、エウエンキとオロチョンの関係、また両者とシベリアの「ツングース」との関係は、既述のように依然として不分明であるから、昨年と今年の調査では、この問題も重要課題の一つであった。

これに対する暫定的回答は以下の通りである。

中国のエウエンキとオロチョンは、元を質せば一つの民族だが、今は最も親しい二つの兄弟民族であるというのが、現代の中国における共通の認識のようである。「両者の関係は如何」との設問にたいして、学者もインフォーマントも異口同音にそのように答えるからである。これは、オロチョン自治旗が少数民族の自治旗の先駆けとして1951年に成立し、1958年には既述のようにエウエンキ自治旗が発足した、との事実認識に基づくものと思われる。ところで、比較的最近にホロンバイルへ渡来したトンクスや

ヤクートはいざ知らず、ソロンとオロチョンの名は少なくとも清代以降の史料に言及されてきており、清朝の「招請を受け入れて山を下り」、牧畜生活を開始したソロンと、「山に留まり」伝統的な狩猟活動に従事するオロチョンとが、そこでは生業を異にする2集団として明瞭に区別されていた。「満州国」時代の日本人の記録でも、両者は「草原の民」ソロンと「山の民」オロチョン（特に「馬オロチョン」）として弁別されており、現在もインフォーマントの多くは、エウエンキとオロチョンの区別を問われると、「片やは牧畜民で、片やは狩猟民だ」と答える。してみると、生業形態という文化的特徴が、ここでは集団識別、即ち民族弁別の目安に他ならなかったのではあるまいか。

しかしながら、少なくとも現在のエウエンキ民族に関する限り、この目安が民族を弁別する指標たりえぬことは、直ちに指摘せねばならぬ。この民族は、既述のように、ソロン、トングス（いずれも牧畜民）とヤクート（狩猟民）よりなる混成集団であって、三者を結びつける指標は、エウエンキという「共通の自称」と当事者の意向、換言すれば、その帰属意識であった。だがこの事例は、中華人民共和国の民族政策、とりわけその「民族識別」の原則を反映するものであることを忘れてはなるまい。伝統的な「民族識別」の指標は、やはり、生業形態であったと考えられる。

要するに、中国の北方ツングース諸族はかつて幾つかの氏族集団に分かれ、それぞれの集団において、山中に残留したオロチョンと草原へ移住したソロンとが区別されていたのではないかと考えられるのである。事実、オロチョンとソロンは多くの氏族名を共有しており、オロチョン語とソロン語は、対話において相互了解がほぼ成り立つ、と言われるほど近縁な関係にある。この点に関連して、北方ツングース語派の方言調査を進めている朝克氏（北京の中央民族学院大学院生）の所説は興味深い。同氏によると、エウエンキ語は（1）輝方言〔輝河、白音查干、伊敏河、阿榮河、黒龍江省に分布——いわゆるソロン方言〕（2）陳方言〔陣巴爾虎旗の莫日格勒

河、錫尼河に分布——いわゆるトングス方言] (3) 敖方言[額爾古納左旗のオルグヤ(敖魯古雅)に分布——いわゆるヤクート方言]に大別され、さらにはオロチョン語も、ほぼ同様に(1)輝方言、(2)陳方言、(3)敖方言に三分できるという。朝克氏の分類が、両語の方言分類における通説とは些か趣を異にするとはいえ、中国のツングース語領域は既にほぼ一巡したと言う、この若きツングース学徒(彼自身、南屯出身のエウエンキである)の見解は、傾聴に値する。

こうしてみると、エウエンキとオロチョンは、現状のように別個の民族を構成するのではなくて、単一の民族をなす方がむしろ自然のように思われる。1982年の統計によると、人口は両民族を併せても23,475人(内訳、エウエンキ 19,343人、オロチョン 4,132人)に過ぎないから、その感も一入である。事実、今回の調査旅行中には、かかる趣旨の発言を幾人かのエウエンキ(より正確にはソロン)の方から聞く機会があった。いずれの場合も、1957年の時点でオロチョンの側が「参加を断った」ため合同はならなかった、と不満気に語られたのが印象的であった。「断った理由は？」と重ねて問うと、オロチョンは既に自分の自治旗を持っていたから、それを失いたくなかったのだろう、とのことであった。してみると問題は、1951年にオロチョン自治旗が成立したのは何故か、に絞られてくるが、これには明瞭な回答を得ることができなかった。オロチョンは最も「原始的な」民族だったから、解放直後に政府はまずオロチョン自治旗を発足させて、その文化・生活水準の向上を図った、と説明する人もあり、またオロチョンからは「偽滿[=満州国]」時代に日本軍協力者を多く出したため、更正の手段として自治旗を組織したのだろう、と考える向きもあった。いずれにも一面の真理はあろうが、この問題はさらなる究明を要する。特に留意すべきは、上に引用した発言がすべてエウエンキの側から「個人の資格」でなされている点である。従って、当局者の公式見解の聴取や当時の関係文献の調査なども今後の課題であるが、何よりもまず、オロチョンの方々

の意見を聞いてみたい。モンゴル文化の影響下にあるソロン、ロシア文化に強く影響されたトングスやヤクートに対して、オロチョンはむしろ満族や漢族の影響が濃厚、と一般には言われている。このような文化状況のもとで、オロチョンが自らの文化をどのように認識しているか、また先述の伝統的「民族識別」の原則によるなら、オロチョンは同じ狩猟民のヤクートに対して一番の親近感を抱くべきであるが、果たして如何であろうか。きわめて興味深い問題である。

エウエンキ民族の歴史的背景についても簡単に触れておく。

北方ツングース発祥の地は、シロコゴロフの提唱した華北説もあるが、現在では、黒龍江上流域からバイカル湖にかけて広がる、かつてダウリアと呼ばれた森林草原地帯とする説が有力である。だが、いずれの説によるにせよ、ホロンバイル盟に今日在住するエウエンキが古来からの原住民ではなくて、近世になってからの渡来民である事実は動かない。そのうちで、過去1世紀の間に渡来したヤクートとトングスについては言及済みであるから、ここではソロンの移住に限って、やや詳しく述べることにする。

黒龍江一帯が露清両帝国間の係争地となった18世紀、同地の住民「ツングース」とダウル（達斡爾）は、いずれも両国軍の先兵として動員され、戦場では同族が干戈を交える悲劇が繰返されたが、清国優勢のもとに事態の推移した間に、庇護を求めて同国へ服属する集団が続出した。清朝はこれらを優遇していたが、中にはガンティムル（根特木耳、この人物については後に触れる）のように、再びロシア側へ帰順していった者もあった。

清朝は1736年、これらの集団のうちから精鋭兵3,000人をえりすぐってホロンバイル草原へ派遣、ロシアに接する辺境の守備に当たらせた。その内訳は、エウエンキ1,636、ダウル730、オロチョン359、陳巴爾虎モンゴル275、と伝えられており、清朝はかれらをもって索倫八旗（右翼旗と左翼旗に分かれる）を編成した。かくして、辺境駐防の民「索倫部」は成立したのである。それ故に清代の記録では、索倫（ソロン）の名のもとに

エウエンキ、即ち本来のソロンの他に上記の3民族も含意されているので、注意を要する。

ところで、エウエンキは元来が狩猟の民であり、ホロンバイル草原へ移住するまでは基本的にこの生業を堅持してきたが、草原生活を始めるに当たって清朝政府より家畜の供与を受け、次第に牧畜文化を習得していったものである。牧畜民ソロンは、それ故、いまだ250年の歴史しか有さない訳で、ソロンの牧畜文化を研究する際には、この事実を常に念頭に置く必要がある。

因みに、1984年7月には、ホロンバイル盟の中部、エウエンキ自治旗と喜桂図旗の境界近くに位置する大雁鎮に索倫部の末裔が参集して、先祖のホロンバイル到来255周年を記念する石碑の除幕式が挙行された。式にはエウエンキ、ダウル、オロチョン、陳巴爾虎モンゴルをそれぞれ代表する約100人が列席、引き続いて研究集会が行われた。駐防兵として渡来したおよそ5代前の祖先の記憶が、子孫の脳裏にはまだ鮮やかに残っているようである。これに出席した努木和巴雅爾氏（70歳、エウエンキ自治旗巴音査干ソム）は、自身の採録したハイランチャ（海蘭查、後出）将軍についての歴史伝承テキスト（エウエンキ語）を文字言語である蒙古語へ自ら翻訳して、研究集会で発表されたそうである。同氏は私の求めに快く応えて、その蒙古語テキストを即席で元のエウエンキ語へ直しながら、全編を私の録音機の前で語って下さった。エウエンキの知識層は一般に蒙古口語のみならず、蒙古文語にも堪能である。

さて、エウエンキ民族の現状に移ろう。

ソ連の学者の集計（1961年）によると、世界には33,000人のエウエンキがおり、その内の26,000人がソ連に、1,000人がモンゴル人民共和国に在住し、中国は6,000人とある。同じ頃の中国資料はこれを7,200人（1957年）と記録しているから、ソ連の集計は実態をおおむね正しく把握していたとみてよい。しかるに1982年には、中国のエウエンキの総人口が既述の

ように 19,343 人となっており、四半世紀の間に 3 倍近くにまで跳ね上っている。果たして、これが自然増だけによるものかどうか、定かではないけれども、とにかくエウエンキがこの間に大成長を遂げたことだけは確かである。

中国におけるエウエンキの分布は、内蒙古自治区ホロンバイル盟を中心とするが、その他に黒龍江省納河県、甘南県、さらには新疆維吾爾自治区にも及んでいる。ホロンバイル盟内では、エウエンキ自治旗に最大の人口結集（7,000 人弱）が見られ、さらに陳巴爾虎旗（2,000 人弱、1 ソム、即ちトングスを主体とするエウエンキ・ソム）、額爾古納左旗（200 人、即ちオルグヤ郷のヤクート）、阿榮旗（3 郷）、布特哈旗（扎蘭屯市および 1 郷）、莫力達瓦ダウル旗（3 郷）、そしてオロチョン自治旗にも、多少ともコンパクトな人口集結があるため、エウエンキを主体とする行政村（ソムないしは郷）が組織されている。これらのうち、今年度はエウエンキ自治旗の旗政府所在地南屯（エウエンキの人口、1,000 人）、輝ソム（同じく 4,000 人）、伊敏ソム（1,000 人）、巴音査干ソム（850 人）、錫尼河ソム（現在は東ソム、西ソム、並びに孟根朝魯ソムに三分されており、東ソムを中心に 500 人のトングスを数えるが、これらのソムの主体はブリヤートである）、それに陳巴爾虎旗のエウエンキ・ソム（2,000 人）を歴訪し、フィールド・ワークを実施することができた。

まずエウエンキ自治旗では、南屯において旗政府関係者からエウエンキの概況を聴取した。同旗にはエウエンキの他にダウル、オロチョン、陳並びに新巴爾虎モンゴル、それに満族と漢族が在住しているが、旗長をはじめ政府の重要ポストの多くはエウエンキが占めており、文革期を脱した 1980 年代初め以降、牧畜奨励策を推進して成果を上げておられる。この間に 1 戸当たりの平均月収は 3 倍増（600 元）を達成している。また一昨年からは、良質の石炭を産する伊敏炭礦が操業を開始しており、全体としてエウエンキ自治旗の経済は活況を呈している。

ここはまた、「満州国」時代に日本人によって各地に学校が設置され、日本語が教育された経緯もあって、旗政府内にもその卒業生がおられ、全般に親日的ムードが漂っているようであった。しかし具体的に話を伺ってみると、日本人としては身の細る思いを味あわされる事実も多々あって、些かきつい体験ではあった。とはいえ、同旗は近年、ホロンバイル草原で大量に産する良質の牧草を日本へ輸出し始めており、両国の牧畜専門家の交流にも熱心である。そのせいだったかどうかは詳らかにしないが、賀喜格扎布旗長は今回の調査に極めて協力的で、私に対して格別の便宜を図って下さった。旗内でも辺境に位置する輝ソム、また伊敏ソムでは最も奥地の獵民集落、吉登ガチャ（嘎查、日本の字に相当する）、巴音查干ソムでも山奥の金星ガチャにおける調査が許されたのも、旗長の特別な好意によるところが大であった、と考えられるのである。

旗長の案内で最初に訪ねた輝（フイ）ソムは、輝河の中流域に立地する牧民の集落である。延々と続く草原の彼方に忽然と姿を現したこのソムは、盛夏という時節柄、住民の大半が羊と牛の放牧のため遊牧区へ出払っており、閑散としていた。旗長を乗せたジープが引き揚げてしまうと、陸の孤島に取り残された感じで心細いことこの上ない。最も近い遊牧区でも車で数時間かかると言われたが、ソム内で唯一のソム政府所属のジープを私用に調達するのは、至難の業である。この時ほど、自由にできる車が欲しいと切実に感じたことはなかった。幸い、60歳台以上の老人が数名、ソム政府所在地の近辺に残っておられたので、聴き取り調査は勢いこれらの老人を対象に進めることになった。

その一人に、達西森格（72歳、以下では「達老」と略記）という方がおられる。達老は漢、蒙両語に堪能な上、扎蘭屯の「軍官学校」出身なので日本語も出来る、ソロンきってのインテリである。42年振りに日本語を耳にして失語寸前という興奮状態から立ち直られると、達老は忽ち優れたインフォーマントに変貌した。本業の牧畜の傍ら、語学力を生かして郷土史

の研究にも打ち込んでこられたので、当方の質問には直ちに的確な回答をもって応えて下さる。ただ、当方の知識不足のため、達老自身の体験や聴き取りに基づく情報と書物から得られた知識とを弁別できないのには困ってしまった。当初はこの点を細かく詮索していたが、必要以上に話の腰を折って達老を苛立たせる結果となり、途中から断念した。この問題は、私自身の今後の文献研究にまつ以外にない。

しかし、先に引いたソロンのホロンバイル移住時の人数や清朝からの家畜供与の事実は、実は達老から初めて聞いたものだが、後者は「政府が当時はまだ清領だった外蒙古のチチン汗ダレガン旗から購入して与えた」と極めて具体的な内容だったから、恐らくは、いずれも文献研究の賜物であろう。一方、「ソロンはいつから越冬飼料を目的とする草刈りを始めたか」との問いに対して、達老は「ホロンバイルに来た当初から行っていた、何となれば、草枯れの年には、西隣の新巴爾虎モンゴルが羊群をソロンに預けて越冬させる慣行が古くからあったからだ。草刈りを行うソロンは、それを行わない新巴爾虎から10頭の羊を預かると、翌春は5頭を返還、5頭は越冬の代価として手元に残した。」と答えられた。この草刈り情報は十中八九まで、達老が耳で集めた伝承に基づくものであろう。

ところで「草刈り」の問題は、かつて梅棹忠夫氏が内蒙古のモンゴルの間でフィールド・ワークをされた時のメイン・テーマの一つで、その成果は1955年の論文「草刈るモンゴル」（『遊牧民族の研究』所収）として発表されている。失礼ながら結論だけを要約すると、モンゴルでは草刈りを行う所も行わない所もあるとなるが、調査地、日時、インフォーマントの氏名年齢を明記し、その発話を可能な限り忠実に収録しようと努める科学的な態度と、またその独特な文体にも、拝読時、感銘を受けた記憶がある。そこで、ホロンバイル草原におけるその実態調査には、些か期するところがあつた。

結論から先に述べると、ホロンバイルでは現在「どこでも」「草刈り」を

行う。それが何時、いかなる契機で開始したかは不明だが、達老に拠るなら、移住当初から実施していた可能性もある。歴史の問題はともかく、定住性を益々強めているエウエンキにとって、「草刈り」は今や、その経済発展の死命を制する最重要課題となっている事実を、まずは指摘しておきたい。牧民エウエンキが、その収入を倍増させるためには、労働力の問題をさておかなければ、現在の経済家畜である牛羊の頭数を倍増する必要がある。馬、ラクダは今日その経済的価値をほとんど喪失しているからである。馬やラクダとは異なり、牛や羊、とりわけ羊は、冬季、自力で採食する能力を欠くため越冬飼料に頼らざるを得ず、その確保のためには、どうしても「草刈り」を必要とするのである。従って、牧民の収入の多寡は「草刈り」量に正比例することになる。

こうなると、ホロンバイルでは「草刈り」を行う、という表現では、もはや実態を伝えるのに不十分で、エウエンキは7月から9月まで「草刈り」に狂奔する、と述べても大して誇張ではないようにも思われる。1987年は、春季の雨量不足で草の成長が遅れたため、8月上旬の輝ソムでは「草刈り」がまだ始められず、男衆は苛立ちを隠さなかった。その後、調査地を求めて北上して行く間には、あたかもビデオ・テープの早送りを見るが如くに、加速度的に進行してゆく「草刈り」のほぼ全過程を圧縮して観察することになった。各地の様子はその都度触れるとして、末尾でもう一度「草刈り」の問題には立ち返ることとしよう。

話を再び輝ソムへ戻すが、1930年代後半の輝ソムの記録が、実は上牧瀬三郎著『ソロン族の社会』（1940年刊）に残されているのである。上牧瀬はここ（著者は地名をホインゴルと記しているが、これは輝河のモンゴル語名 Hoin-goloを採用したもの。エウエンキ語ではHoi-to）に日本語教師として6年間在住し、その間の見聞録をまとめたのが上掲書である。私は半世紀を隔てた輝ソムの今昔を比較するために、これを複写して持参した。しかし、記録されている風俗習慣については、幾ら尋ねても返って来るの

は「もうない」か「知らない」という返事ばかり。すっかり当て外れだった。だが、同書の巻頭に収録の23葉の写真を見せると、表情が一変した。人々は息を殺して暫し凝視していたが、電子コピーで不鮮明さは倍加された画面にもかかわらず、大きな歓声とともに知人の若き姿を次から次へと発見し始めた。これを契機として、写真を見るためにわざわざ尋ねて来る人もあり、付き合いの輪は一遍に広がった。

輝ソムの言語事情についても簡単に触れておこう。

エウエンキ語が依然として日常的に話されている点では、上牧瀬の時代と大差がないとも言えるが、現在はここでも大きな地殻変動が進行中である。ソム内には政府舎のすぐ近くに唯一の小学校が設置されており、授業は蒙古語で行われている。遊牧の季節には両親とも夏営地に蒙古包(パオ)を設営して移り住むので、生徒は一般に定住地で祖父母と暮らす。生徒が蒙古語を習得してゆくにつれて、就学前に身に着けたエウエンキ語は忘れていく傾向にある。就学率が高まる程に、この傾向は強まると言われ、子供の進学を望む親もこれを歓迎する向きがあるらしい。こうして、親は蒙古語が、子供はエウエンキ語が出来ないで、親子の間に共通の言語を欠くという家庭すら現実に出ていると聞く。解決策の一つは、早急にエウエンキ文語を作って、学校教育の言語に採用することだが、それはそれでまた、高等教育では不用の今一つの文語の学習を生徒に強いることになり、新たな難問を生む。これは、世界中で多くの少数民族が直面している、極めて普遍的な問題の一つである。

インフォーマントで漢語の出来る人は、むしろ例外的な存在だった。年長者の間には蒙古語を解さない人も結構いて、そのような人々と「対話」する時は三人の通訳を介在させる必要があった。調査旅行には、内蒙古社会科学院から派遣されたモンゴル青年が案内役兼日本語通訳として終始同行してくれた。だが、彼はモンゴル族にもかかわらず蒙古語が出来ないから、エウエンキ自治旗政府は民族事務局の係員を、これまた案内役兼通訳

として必ず一人は付けて下さった。輝ソムに随行してくれたのは、漢語と蒙古語が拔群に出来る新巴爾虎モンゴルの青年である。エウエンキ語はおろか、蒙古語にも漢語にも門外漢である私が、曲がりなりにも調査を遂行できたのは、ひとえに彼のお蔭である。しかしその彼とてもエウエンキ語までは出来なかったから、上記のような場面では蒙古語に堪能な土地の人が通訳を買って出てくれて、漸く事なきを得た次第である。蒙古語は、この地における唯一の文語であるから公用語としても機能しているとはいえ、文語を駆使できる人が大勢おられるとは思えなかった。ただし蒙古口語に関する限り、大多数の人はこれを話し、聞く能力を身に付けているようだった。従って、もし私が蒙古語を解したならば、もっと大きな成果が上げられた筈である。学生時代には蒙古語学習の機会があったのに、それを生かさなかつた己の不敏を改めて恥じた次第だが、後の祭りである。

輝ソムではまた、特にお願ひして、牧民の一日を参与体験させて頂いた。夏営地の木莫道に蒙古包を建てて羊と牛を放牧中の白花さん（55歳の寡婦、末の娘と2人の息子と同居）の包を出入り自由にして貰って、早朝5時から夜の9時まで、家族全員の動きを逐一フィールド・ノートに記録していったのである。「草刈り」開始直前という時間限定付きの夏の日だったが、生活のリズムを構成するのは、朝夕の搾乳、料理、洗濯、裁縫など、すべて女の仕事であった。白花さんは腰部骨折でベッドを離れられないので、これらのすべてを姉娘（27歳）が一人で取り仕切り、平然とこなしていた。二人の弟は牛追い、水汲み、マキ割り、トラクター修理の合間には馬を乗り回すなど、所在気ない。

生活リズムの焦点は、何といても、早朝と夕方の乳搾りである。15頭の乳牛を相手に毎回一時間かけて仕上げるこの作業は、質量ともに一番の重労働だから、さすがに弟の一人が助手役を勤めた。彼女がこの日、エウエンキの伝統的な衣服「蒙古袍」を身に着けたのは、用足しに出掛ける時とこの時だけであった。いずれの場合もその実用性が顕著であり、民族

衣装は今後ともこのような形で生き続けるのであろう。夏場の収入源は、牛乳の売却益を基本としている。この日は総搾乳量が80キロであったから、一家の粗収入は28元ということになる。

輝ソムの次に訪れたのは、伊敏ソムの東南端に位置する獵民集落、吉登(チトン)ガチャである。伊敏ソムは8ガチャからなり、人口は2,749人、そのうち1,000人がエウエンキだが、主体はモンゴルである。林場や炭礦には漢族もあり、1950年代まではロシア人も在住していた。エウエンキの大方とモンゴルは牧民であるが、31所帯150人のエウエンキは狩を生業とする獵民であり、吉登ガチャに住む。

吉登ガチャは大興安嶺の山麓に立地しており、1980年までは紅花児基の奥に住んでいたこれらの獵民が、旗政府の指導によって、獵場に近接したこの地へ移住して来たものである。従って、このガチャはいまだ建設途上にあって、来年には政府が煉瓦造りの一戸建住宅を建設してくれる、との話であった。また私の滞在中に、図書室と集会室よりなる文化センターが落成し、これを祝う式典と「小ナグム」には私も招待される光榮に浴した。

ここの住民は、狩獵民とはいえ、狩りだけで生計を立てることが出来ず、牛、羊、そして馬も必ず飼育している。牛羊は基本的に自家消費用、また馬は出獵に必須の家畜なのである。但し、牧畜がよそのように遊牧形態を取らず、冬季以外は、ガチャ内にある広大な草地に家畜を放し飼いにする。その世話は女の仕事である。「草刈り」は小規模ながら必ず行うというが、滞在中は始まらなかった。また各世帯には必ず数頭の犬がいたけれども、調教が難しいから獵民には使用しない、とのことだった。これからも予測できるように、獵師たち、とりわけ若い獵師たちは、腕前は悪くなさそうだが、俄仕込みの狩人が多くて、獲物の処置を尋ねると、「皮だけ剥ぎ取って、あとは捨ててくる」などと乱暴なことを言う。どうやら、伝統的な狩獵のしきたりとは全く無縁のようであった。

唯一の例外は、持病の心臓病で今は現役を退いておられるが、ガチャー

番の猟の名人だった参布山（59 歳，以下では「参老」と略記）老人である。猟師の一生，年周期，信仰，儀礼の全般にわたって，特に熊を仕止めた時に行く「熊祭り」についても，参老からは詳細な話を伺った。だが，よく聞いて見ると彼はオロチョン自治旗の阿里河生まれのオロチョンで，15 歳まで過ごした故郷において狩りの手ほどきは既に済ませておられる，とのことであった。うろたえた私は，伺った話が果たしてオロチョンのものを含んでいないかどうか，確かめようとすると，猟に関してはエウエンキもオロチョンも一緒だ，と取りつく島もない。始めに確認しておかなかったのは，大失策であった。

参老のライフ・ヒストリーについて尋ねていた時である。15 歳から 24 歳まで牧民として働き，猟はしなかった，と言われた。エウエンキの男の許へ嫁入りする姉上に連れられて紅花児基に移ってからの 9 年間（1943—1952）である。初めは，羊や牛の頭数が多かったから牧民になったと説明されたが，暫しの躊躇ののちに，実は，日本軍が鉄砲を取り上げてしまったから，猟はしたくても出来なかったのだ，と真相を打ち明けられた。正直言って，ショックだった。狩猟民から銃を没収するなら狩猟廃業は必定，日本軍の悪業はある程度まで覚悟していたが，このような話までは迂闊ながら予測できなかった。狩猟伝統の断絶は，これと深い関わりがあるものと思われる。

今一つショックだったのは，エウエンキに及ぼしたモンゴル文化の影響の根深さである。輝ソムでも吉登ガチャでも，「靈魂」を何と言うかは必ず尋ねることにしていた。シベリアのエウエンキは，オーミー（祖霊），ハニャン（影魂），ベイエン（肉体魂），マイン（運命魂）と，少なくとも 4 種の「靈魂」を区別しているから，ホロンバイルでは如何というのが動機だったが，驚いたことには 4 種の名称のいずれも知られず，「靈魂」としては，ただスヌス（sunusu）という蒙古語だけしか出てこなかった。信仰の核心をなす「靈魂」にしてからがこの始末だから，あとは推して知るべしであ

る。

吉登ガチャから海拉爾への帰路、伊敏ソムは畢勒図ガチャの蘇倫其其格宅で一宿一飯の恩義に与った。ここは伊敏河畔に広がる大草原に立地しており、輝ソムと同じく、エウエンキを主体とする牧民の集落である。但し、その経営規模は輝ソムよりも大きくて、牧畜の機械化もかなり進んでいる。その一因には、交通の便が指摘されよう。海拉爾から伊敏炭礦までは、鉄道の他にアスファルト舗装の道路が完備し、その延長も含めた、「エウエンキ旗の動脈」をなす幹線道路が畢勒図ガチャを貫通しているからである。

機械化の事例として、草刈り機の普及を挙げたい。輝ソムの遊牧区、木莫道で聞いた話では、機械の貸借が盛んで、使用料や手伝いは牧草で支払われるが、草が売買の対象となることはない、またロシア式の鎌で草を刈る者もまだいる、とのことだった。一方、畢勒図ガチャでは各世帯が既に自前の草刈り機を持っており、男衆は割り当てられた各自の草刈り場へ機械を持ち込み、連日泊り込みで草を刈り、人手が足りない時は使用人を雇うこともあるという。これは、各世帯が機械を導入しても採算の取れるだけの家畜を所有していることを意味していよう。私の出発の朝、蘇宅ではトラクターを仕立てて草刈り地へ旅立つ末息子（24歳）と使用人を見送った。ここで漸く「草刈り」の開始と出喰わした訳である。一家では牛50頭と羊30頭を飼育していて、6,000ブードの越冬飼料を確保する必要があるという。4人の働き手を擁するこの一家の年収は1万円、いわゆる「万元戸」である。

ここでも、よいインフォーマントに恵まれた。満嫩花（70歳、女性）と達木林扎布（64歳、男性）の御兩人である。前者からは牧民の女の一日を聞いた。現在に関する限り、輝ソムの女性と大同小異だが、まだ蒙古包で暮らしていた50年前の話も聞けたのは収穫だった。後者はまだ現役の牧民で、「草刈り」の現場から駆けつけて下さった。彼の話で特に興味深かったのは、この地に定住（1962年）する以前の彼らが家畜をほとんど持たず、

むしろ獵民の色彩の方が強かった、というくだりである。また彼からは、
牧畜を司るチャシ（吉亜西）神と狩獵を司るバイナチャ（白納查）神につ
いて、初めてまとまった情報を得た。しかしながら最大の収穫は、何といっ
ても、エウエンキ語のフォークロアを御両人に語ってもらい、これをテー
プへ収めるのに成功したことである。その内容は、「シャマンの話」、「二人
の兄弟の話」、「謎など」といった散文や、「子守歌」、「踊りの歌」などの歌
謡であるが、とりわけ「踊りの歌」では、満嫩花さんと女主人が手を取り
合って足を踏み鳴らし、踊りを実演しながら歌を紹介してくれた。

ロシアの建設した鉄道沿いに海拉爾から東行すること 100 キロ足らず
で、巴音査干（バインチャガン）ソムに至る。このソムは莫和爾図、金星
（扎拉莫台）、扎都莫達の 3 ガチャよりなり、総人口が 1,062 人、そのうち
の 6 割を占めるエウエンキの他にダウル、モンゴルが在住する。私がベ
ース・キャンプにした金星ガチャは人口 186 人、全戸 40 世帯中 36 世帯が
エウエンキという牧民集落である。これは、農耕も行うダウルが主体の莫
和爾図ガチャとは好対照をなしている。

金星ガチャでは「草刈り」が酣であった。宿を提供してくれたソム長（28
歳）によると、人民公社を清算した 1982 年以降、家畜も草刈り地も世帯毎
に分配したから、現在はすべて個人経営になっているという。一世帯平均
20～30 頭の牛を飼育し、牛 1 頭当たりの越冬飼料が 100 プードだから、各
世帯は最低 2,000～3,000 プードの牧草を刈らねばならない計算になる。無
理は承知の上で、「草刈り」の現場へ赴く車の手配を要請したところ、ソム
所属のジープ 1 台を 1 日だけ借り受けることに成功した。

ここは起伏の激しい丘陵地のため、ソム長の案内で彼の草刈り地まで辿
り着くのに幾つの山を乗り越えただろうか。ジープのお蔭で山の腹を垂直
に上がり下がりを繰り返しながらも、片道 2 時間はかかったと記憶する。と
ある山の中腹に広がる大草原が、その現場だった。

そこでは 1 台のトラクターが「打草」作業中であった。トラクターの脇

に大きな刃を取り付けただけの草刈り機が、円周を描いて往復する間に、通過地の右側約3メートル幅の範囲内の草が薙倒されてゆく。この結果作り出された渦巻き模様で一定の区画が埋め尽くされると、もう1台のトラクターの出番となる。これは、幅10メートルをゆうに越す鉄製の「熊手」を牽引して、方形の運動を繰り返しながら、集草してゆく。集められた草は、乾燥のためにその場で高く積み上げられてゆく。こうして、「草刈り」の完了している地表には無数の半球状堆積が、あたかも碁盤の目に碁石を規則正しく並べたかのように、延々と連なる光景が広がり、壮観である。この全作業を、たった2人で黙々と続けていた。彼らは近くに「蒙古包」を設営し、そこに寝泊りしながら、連日、この単純作業に勤しむのである。

ほど遠からぬ所に、鎌を使って人手で「打草」中の現場があるというので、勇んで駆けつけた。成程、かなり急な斜面の草地で2人の男が、長い柄に真直ぐの刃を垂直に取り付けた、漢式の鎌を奮って草を刈っている。刃渡り40センチほどの鎌なので、一振りですべて半平方メートルの範囲が刈れる程度の動作を、半裸の男たちは黙々と繰り返している。近づいてカメラを向けると、作業は小休止。彼らの話によると、このような傾斜地にはトラクターが入れないから手刈りする他ないが、機械導入以前はすべてこうして刈っていたのだよ、と涼しい顔であった。ここにも半球形の堆積が、些か不規則な碁盤目状ではあるが、もうかなり並んでいた。

努木和巴雅爾（70歳、以下では「努老」と略記）老人によると、子供の頃はまだ完全な遊牧生活で、五月から八月まで滞在する夏営地での放牧を終えると、良い草を求めて遊牧したという。その間には牧草の豊富な所を選び、草を刈ってそこに積み上げておき、冬になると戻って来て越冬した。かかる冬営地は、従って、毎年変わるのが原則だった。また当時は、家畜の頭数が少なかった（努老の記憶では、馬2～3頭、牛3～4頭）から、場所によっては「草刈り」をしなくても越冬できたともいう。こうした努老の情報は、ホロンバイルにおける「草刈り」の生成過程を示唆するように

も思える。即ち、「草刈り」は元来、秋季、越冬予定地に牧草を刈り溜めしたことに由来し、その後家畜頭数が増すにつれて本格化していった、と考えられるのである。近年進められている牧民の定住化は、一般に、冬営地における集落形成を意味するが、「草刈り」の発展をさらに一步進めたとみてよからう。上記の半球状の草の堆積は、やがて定住地へ運ばれ、住居の脇にうず高く積み上げられるとの説明を受けたが、その実態はのちに陳巴爾虎旗で確認することになる。

努老はまた、ロシアによる鉄道建設にともなって、ロシア式の鎌が「草刈り」に導入されて作業効率を高めた、と考えておられる。これには異見もあって、漢式もロシア式も鎌の効率には大差なく、どちらを選ぶかは好みの問題だという。それはともかく、鉄道沿線に位置する巴音査干ソムにはロシア人の建設労働者が住みついたり、ロシア農民が入植した事実があったらしい。金星ガチャでも2人の老人は、昔、ロシア人のもとで働いた経歴があって、私とロシア語で対話してくれた。ここでも通訳では頭を痛めていたから、インフォーマントとの間に共通の言葉が見出せたのは、無性に嬉しかった。

既述のように、努老にはハイランチャ將軍（1737－1793）についての歴史伝承を語ってもらった。この人物は、清が台湾やチベットを攻めた時（1755－56）に武勲のあった將軍で、その故に超勇公という称号を得て、北京の故宮紫光閣にまつられている。エウエンキはこのエウエンキ出身の武將を今も誇りに思い、民族の英雄として尊敬している、とのことだった。そもそも私は、ガンティムル（前出）に関するフォークロア資料に興味があって、これまでも各地でこの人物について尋ねてきたが、名前は聞いたことがある、という回答以外には接しことがなかった。そこで、同じ質問を努老へ向けたところ、返ってきたのがハイランチャの伝承であった。

ガンティムルは1660年代の後半に、清の皇帝の逆鱗に触れて、300人の家来を引き連れてロシアへ帰順、ロシア側は彼に洗礼を施した上でモスク

ワの貴族にとりたてた、と伝えられる。爾来、彼の子孫はガンティムロフ姓を名乗り、日露戦争で手柄を立てたロシア軍将校ガンティムロフもその一人と言われる。ところで清側は、「逃亡した」自国民ガンティムルをロシアが受け入れたばかりでなく、キリスト教徒に改宗せしめたのを不快とし、露清交渉では一貫してその身柄返還を要求し続けた。このためガンティムルの名は露清交渉史に度々登場することになり、その意味でも著名なる人物なのである。

私の関心は、やや別のところにある。「ツングース」の著名人ガンティムルについて子孫はどのように伝承しているか、特にシベリアと中国の伝承の間にどんな異同が認められるか、比較してみたいと考えている。現代の中国において、清朝の反逆者ガンティムルを「民族の英雄」として語ることへの遠慮は、ないものと考えたい。

ロシア革命時に内乱の戦場となった故郷のザバイカル地方を捨て、中国領へ避難して来たブリヤートとトングスは、当初、伊敏河流域に落ち着いた。その後にオルグナ河を渡って移住して来たトングスは、莫爾格勒、徳尼両河流域の陳巴爾虎モンゴルの夏営地に割り込んだ。かくしてトングスと呼ばれる集団が、エウエンキ自治旗の錫尼河ソムと陳巴爾虎旗のエウエンキ・ソムに分立することになった。ザバイカル地方在住時から、トングスはブリヤートと和戦両様の構えで深く付き合い、牧畜文化の大方はブリヤートから習得したもののものである。ブリヤートはトングスをハムニガン（カ木尼甘）と称する。シベリアでは、この名称が一般にブリヤート化したエウエンキを意味する。トングスはまた、ロシア文化からも強い影響を受けていた。彼らは久しくロシア正教徒であり、洗礼名であるロシア名を名乗り、一般にロシア口語には堪能である。ロシア文化の影響は食生活から風俗習慣に至るまで広範に及ぶ。

そこでまずは、ホロンバイル盟のマイクロ・バスを1台チャーターして、旧錫尼河ソムを訪ねることにした。既述のように、ここは現在、錫尼河西、

孟根朝魯、錫尼河東の3ソムに分かれており、トングスは錫尼河東ソムに集中しているが、ジープ以外では河を渡ることが出来ないので、東ソム行きは断念した。幸いなことに、孟根朝魯ソムには、かつて陳巴爾虎旗のエウエンキ・ソム長を10年勤めたドゥゴル・ナランニメウィチ・ノスコフ（61歳、漢字名は那都古爾）老人が住んでおられ、トングス並びに陳旗エウエンキ・ソムの歴史について特訓を受けることが出来た。これが陳旗での調査に大いに役立ったことは言うまでもない。

ドゥゴル老の教示で特筆に値するものが二つある。トングスもやはり「靈魂」をスヌスと言い、その他の言い方はないというのがその一。その二は、婦人の長衣に関する限り、トングスとブリヤートは同一のものを着用するが、トングスのものをブリヤートが借用したことを証する伝承をトングスは持つこと。これは、両袖の肩口が盛り上がり、またウエストの部分が蒙古服のようにズンドウでなくて、西洋服のように細くなっているところが特徴である。実は、シベリアのブリヤート婦人がこのような長衣を着用することは承知していたので、街頭でよく見かける事例をブリヤートのものとばかり思っていた。ところが、孟根朝魯ソムの御婦人たちもすべてこの型のものを着ておられたから、思い切って尋ねてみた次第である。但しブリヤートは、トングスこそ借用者だと主張しているらしい。いずれにせよ、ロシアの婦人服が原型ではないだろうか。

陳巴爾虎旗はエウエンキ自治旗の北方に位置し、その北界は中ソ国境のオルグナ河である。陳旗を貫流する莫爾格勒河（海拉爾河の支流）の上流域には、河の名に因んで莫爾格河ソムとも称され、また人民公社時代にはエウエンキ公社とも呼ばれていた、エウエンキ・ソムが立地している。ここに在住のエウエンキ、即ちトングスは、既述の通りザバイカル地方より、1918年から1930年にかけて移住して来たものである。過去20年間に人口は倍増（200世帯、2,000人）して、ソム内の7ガチャ（50年代は巴嘎、文革中には隊と称された）に分住している。

まず私は、ソム政府所在地の哈吉ガチャにある招待所を根拠地に定めた。呼和浩特で入手した『鄂温克族社会歴史調査』（1986、呼和浩特刊）には、1958年に実施された中国人の調査報告が収録されていて参考になった。特にその末尾には情報提供者名録が掲載されており、これに基づいて早速に面談希望リストを作製して提出したところ、30年近い歳月の間に、最もあてにしていたシャマン助手も含め、あらかた故人となっておられて、いたく落胆させられた。折り悪しく連日の豪雨で、ジープすら足止めとなる始末、勢いインフォーマントの探索は哈吉ガチャ内に限られることになった。

哈吉ガチャは山合いに広がる盆地で、湧水地の周辺に開けた集落である。このため大雨の後には大半がぬかるみと水溜りで覆われ、隣家を訪ねるのですら大仕事だった。ここにはロシア式家屋が散見されるので、尋ねてみると、案の定、ロシア人集落のあった所であった。それまでは遊牧生活を送っていたトングスが、50年代に離村するロシア人から家財ごと買取って、定住生活を開始したのである。中には購入した家屋を遠くから移築した事例もあった。従って、ここに住むトングスは資力のある、比較的裕福な部類に属する。そのようなロシアの百姓屋（イズバ）の持ち主、セラフィム・アレクセイェウィチ・ペトロフ（75歳）老人がインフォーマント第1号であった。

セラフィム老はザバイカルのボルジャ生まれ。1918年、6歳の時に両親に連れられ避難してこられた。若い頃仕事で覚えたロシア語をよく記憶しておられ、私とは専らロシア語で話された。名前は父称を伴う完全なロシア名であり、出された御馳走は黒パン（ライ麦を原料とする本格的なロシアのパンで、自家製である）、屋内の一隅には正教の祭壇が設けられるなど、古いロシアの文化要素は枚挙に暇がない。一瞬、中国にいるのを忘れた程である。勿論、ロシア正教徒であられる。うっかり、「シベリアのエウエンキは靈魂が4つあると言っているが」と水を向けると、居住まいを正して、靈魂は「聖書にある通り一つである」と叱正の面持ちであった。

セラフィム老からは、従って、トングスの氏族名を含む社会組織や移住後の生活を中心に話を伺った。「満州国」軍の軍人になった弟、額爾德尼(54歳、現在は陳旗人民代表大会副主席を勤めておられ、私は帰路、巴彥庫仁でお会いした)氏が、戦後、外蒙古に抑留された話なども興味深かったが、ここでもまた旧知の日本人の消息を尋ねられて閉口した。セラフィム老はとて懐かしそうに、海拉爾の「ハヤシ」バクシ(蒙古語で先生を意味する)、「カワグチ」バクシ、南屯の「タカサカ」センセイ(女教師)の名を挙げ、生きておられるなら是非会いたいね、と言われる。さらに日本軍が徳尼河に開いた「通古斯学校」には、「ヤマダ」バクシとエウエンキ語に堪能な「ヌノムラ」という若い人もいたそうである。輝ソムの上牧瀬三郎氏も含めた、これら日本人の消息については、今後、国内調査を行う所存である。情報をお持ちの方は、是非、御教示いただきたい。

ところで、セラフィム老はまだ現役の牧民で、牛40頭、馬15頭、それに羊もかなり所有しておられる。これらの家畜の越冬飼料としては、毎年5,000~6,000プードの草を刈らねばならないという。

住まいの直ぐ脇の広い板囲いの中には、高さ4メートルにまで乾草が積上げてあった。つまり、ここでは既に「草刈り」が完了していたのである。その中から草を引き出して「ロシア語で」4種の名前を教えて下さったが、どういう訳か辞書には見当たらないので、いまだに草を特定できずにいる。さらにセラフィム老は、御自慢のロシア式草刈り鎌「リトフカ」を納屋から出し、実演して見せて下さった。湾曲した刃部が青光りして、これまた現役であることは歴然である。

哈吉ではセラフィム老の他にも、フェドート・ニコライエウィチ・ペトロフ(75歳、孤児のため出生年是不詳。従って、これは推定年齢)、巴德瑪罕都(64歳、女性、以下では「巴嫗」と略記)、それにトングスと結婚しているロシア女性、ヴェラ・インノケンチエヴナ・シュルキナ(50歳)といった方々の面接調査も行うことが出来た。巴嫗を除いては、すべて通訳なし

にロシア語で対話することが可能だった。

ところで巴媼は、ロシア語が出来ないだけでなく、その名前もロシア名ではない。ロシア名をお持ちの方々がトンクス文化をほとんど伝承しておられないのに対し、巴媼は伝統文化をよく保持しておられるようであった。話は女の一生を中心に聞いたのだが、その他にも冠婚葬祭やシャマン (bo) について若干の情報を得ることが出来た。スヌスについても御承知で、シャマンは病人の体を離れたスヌスを捜して来ることによって病気を治すのだという。これはシベリアのエウエンキと同一の考え方である。

巴媼によると、昔の遊牧生活では「草刈り」を行わず、一年を通じて7~10日毎に放牧地を転々と移していたという。つまり、冬季も移動していた訳である。但し、秋に草を刈ることはあり、その場に残しておいたものを、家畜の出産期である春に戻って来て飼料にしたのだそうだ。彼女の記憶に基づく、20歳の頃に冬の移動はなくなったが、「草刈り」が始まったのは、ロシア人が立ち去ったあとだったという。実年代に直すと、前者が1943年頃、後者は1950年代後半に当たる。

雨が上がると、他のガチャとの往来が漸く可能となった。待ちに待ったフォークロア伝承者のトマー・ムンクイエウィチ・スハノフ (59歳、エウエンキ名、Tuma Munku Jatok [雅特庫]) 氏が、何と馬で駆けつけてくれたのは、恐縮の極みであった。トマー氏は、ロシア語の他に蒙古語、漢語も解され、日本語も1年ほど勉強されたそうだが、本業は牧民である。上の世代の伝承者はすべて亡くなられたそうで、トンクスのフォークロアを伝える者は、祖父のレパトリを継承したトマー氏一人になったといわれる。

一夜明けた早朝から収録を開始した。トマー氏はトンクス・フォークロアのうち、昔話 (テーレグ) 5篇と伝説 (ウリゲリ) 5篇を伝承しておられるという。期待していたガンティムルの話は知らないと言われるので、得意とされる昔話から語ってもらった。右手をやや持ち上げ、左手で軽く膝

を打ちながら、淀みなく語り続ける、彼はすばらしい伝承者であった。午前中には昔話が完了し、昼食と小休止ののち、「メルゲン」を主人公とする伝説へ移った頃から、語りは佳境に入り、遂に自家発電の電灯が消えるまで続けられた。トマー氏によると、レパートリーはすべて語り尽くされたそうである。

ソム所属のジープが借りられて、旧解放軍駐屯地第146番号地に住むパーウェル・ニコライエフ（蒙古名オルタ）老人を訪ねての帰り道のことである。遠くの丘の南面に見慣れぬものを認め、墓地だと言うので回り道して立ち寄ってもらった。近づくにつれて林立する墓標が見えてきたが、若干の例外を除くと、すべてロシア式の十字架であった。十字架にはロシア文字で氏名と生没年が記され、ここにも古いロシアが残っていた。十字架以外の墓標は比較的新しいもので、蒙古文字で書いてある。察するに、トングス文化の変容がここには反映されているように思われる。ロシア文字を知る老人たちが死んで、今や碑銘も、教育の言語で記されるようになったのではなかろうか。エウエンキ・ソムを去る日、トングス文化の伝承者として知られるアレクセイ・セミョノウィチ・バルガチョフ（71歳）老人に会うため、ソ連国境に近い烏力楞古へ向けて車を走らせた。アレクセイ老は草原の真中に包を張って、娘さんと二人で遊牧生活を送っておられる。短時間ではあったが、有益な話をいろいろと伺った。とりわけ「草刈り」については、遊牧生活者の現状を知ることが出来た。即ち、ここでは冬季も羊を放牧するから越冬飼料は不要だが、春先の出産期には乾草が必須だから、「草刈り」は行うとのことだった。これは、先の巴媼の情報を裏付けるものである。

アレクセイ老の許を辞去したあと、車は一路西の方、陳旗の旗政府所在地、巴彥庫仁へ向けて走り続けた。下る一方の道から、エウエンキ・ソムは相当の高度にあることを改めて知らされた。平原に出ると、驚いたことには、われわれの車が次々と、乾草を満載したトラックや牛車を追い越す

ようになった。山では終わっている「草刈り」作業が、平地ではまだ完了せず、半球状の堆積で暫く干した草を定住地へ運ぶ、その最後の段階が今や酣なのであった。

* * *

同様の情景とは、錫尼河の孟根朝魯ソムから海拉爾への帰路にも出喰わしている。

その時もトラックであれ、牛車であれ、荷台には道幅大の木枠を敷き、その上に乾草を山なりに積上げて、さらにその上には人間すら載せてあった。山の頂上に悠然と鎮座まします人間は、ひょっとすると、不安定な草の山を自分の重みで押さえていたのかも知れない。にもかかわらず、草は僅かながら絶えず落下して、アスファルト舗装を覆ってゆく。乾草を満載した車両の列がその上を超安全速度で進む。対向車とすれ違うところは、まさに見物であった。このため「エウエンキ旗の動脈」は年に一回、この時期に大渋滞に見舞われるという。今年は「草刈り」が遅れただけに、渋滞も一段と激しかったようである。

ところで、この秋のページェントは、農民の収穫に匹敵する、彼ら牧民にとって最も重要な年中行事でもある。「草刈り」量が収入に正比例する今や、彼らとても好むと好まざるとにかかわらず、これに「狂奔」せざるを得ない理由がある。だが、このような事態は比較的近年に、恐らくは草刈り機の導入に伴って、出来たのではなかろうか。遺憾ながら確認を怠ってしまったが、人民公社の時代に、かかる「狂奔」があったとは考えにくいからである。

とはいえ、「草刈り」は、輝ソムの達老の話にあったように、ソロンがホロンバイルに渡来した当初から、連綿として実践されてきた可能性がある。そこで「草刈り」が、いつ、どのようにして、開始されたかを問うのは後

回しとし、まずは(1)春営地における「草刈り」、(2)冬営地における「草刈り」、(3)定住後の「草刈り」の3類型を設定して、個別に検討するところから始める。

(1) 春営地における「草刈り」

陳旗の巴媼とアレクセイ老によるなら、出産期の家畜には飼料を与えることが望ましく、遊牧生活者においてすら、春になると秋に乾草を備蓄したところへ戻って来て、出産に備える傾向が認められる。周年を定住しない遊牧に伴うこの「草刈り」は、論理的にも端緒の形態と措定することが許されよう。だが、この萌芽形態に関する情報がトングスにのみ由来し、ソロンからは聞かれなかったことを、もっと重視すべきかも知れない。トングスは牧畜文化をブリヤートに学び、またロシア文化の影響を強く受けてもいるからであり、事実、ブリヤートもロシアも「草刈り」を実践する民族である。しかしながら、この萌芽形態それ自体は両民族の文化とは無縁のように思われる。

(2) 冬営地における「草刈り」

夏から秋にかけて遊牧する間に、牧草の豊富な場所を選んで草を刈り、冬が訪れるとそこへ戻って越冬する。家畜の出産までは、ここに留まるのが一般のようである。前類型との違いは、滞在が長期化すること、従って刈る草の量も格段に増加する点にある。要するに、この類型では越冬飼料を確保する必要がある、そのために草を刈ることをもって「本格的な草刈り」と呼ぶことにしよう。これまで括弧つきで表現してきた「草刈り」も同義である。定住生活へ移行する以前のソロンは、基本的にこの形態を採っていたようである。末尾にその一部を資料として付載する江上波夫氏の『満洲国に於ける諸民族の概況と目下重要な民族問題』(調査実施は1943年)にも、「斯く彼等 [= ソロン] は遊牧を行ふも、冬季の為には乾草貯蔵の慣習を有し、之れが普遍的に実行されつつあり」と記してある。巴音査干ソムの努老の記憶に残る往時の「草刈り」も、この形態である。ここで特に注

目されるのは、冬営地が年毎に変わったこと、そして越冬飼料確保のために、半球状の堆積で製した乾草を冬営地に集積する、「貯蔵の慣習」があったことである。

(3) 定住後の「草刈り」

既述のように、エウエンキの定住化は、一般に、冬営地における集落形成を意味しており、実は、それまで転々と移していた冬営地を一箇所に固定するだけに過ぎない。夏には、輝ソムの例のように、牧民だけがこの定住地から遊牧区、即ち夏営地へ従来通り家畜を連れて移り住むけれども、冬になると定住地へ戻って来て、家畜は囲いの中で越冬させる。そこで必要となるのが、冬営地における「草刈り」で始まった「貯蔵の慣習」のさらなる発展であろう。

エウエンキの定住開始は場所によってはかなり早く、各地で自然発生的に成立したものようである。例えば上牧瀬三郎の著書によると、輝河流域では定住生活が少なくとも 1940 年代には行われていた。解放後の中国では定住化が政策として推進されたこともあって、エウエンキのもとでもここ 10 年の間に全域ではほぼ完了をみている。この間における「草刈り」の変化は、当初は、必要に応じて量を増減させるという、量的な変化であったと考えられる。但し、企業心に富み、地の利を得た牧民が牧畜経営を質的にも飛躍させた事例はあったかも知れない。

そもそも定住化のメリットは、教育、医療、生活水準の向上にあるといわれるが、伝統的な遊牧文化の放棄というデメリットを補って余りある、経済面での優位性が大前提とされねばならない。とはいえ陳旗のアレクセイ老のように、その優位性に背を向けて、遊牧生活を今なお固守する牧民が僅かながら存在するのも事実である。

しかるに、かかる経済面での優位性は、遺憾ながら、当初から想定する訳にはゆかない。収入が「草刈り」量に正比例するという、既述の牧畜の鉄則によるならば、拡大家族をもって経営単位とするエウエンキの牧畜形

態が不変である（これは現在も基本的に踏襲されている）以上、「草刈り」作業の生産性向上と生産物の販路確立を待って初めて、かかる優位性は実現され得るからである。これらの条件がともに出揃ったのは、ここ10年のことである。即ち、草刈り機の導入と定住地への道路網の整備に加えて、折りしも、文革期の混乱を脱した中国経済の活性化に伴う牧畜産品への需要増大が同調したところへ、牧畜の経営主体が人民公社から牧民個人へ移されたのである。かくして「草刈り」の第3類型が怒濤のごとく普及する条件は整ったといえる。海拉爾の乳製品工場の集乳車が各定住地を恒常的に巡回するようになり、牧民の間では牛乳が換金商品として完全に定着してきた。羊も元来は足の生えた冷蔵庫とみなされて、自家消費用の食料だったのが、今や使用人を雇ってでも飼育頭数を増やす、商品化の方向へ路線は切り替えられている。そしてその基礎をなすのが、今回ホロンバイルで私の観察した「草刈り」の「狂奔」に他ならない。既に牧民の間からは、伊敏ソムの蘇家のような「万元戸」を輩出している。

以上の3類型は、論理的にもその儘で、ホロンバイルにおける「草刈り」の3発展段階に措定することが可能である。即ち、「草刈り」は春営地でまず開始され（第1段階）、冬営地にて本格化し（第2段階）、定住地において完成を見る（第3段階）という発展過程を辿ったと想定されるのである。言い換えるならば、それはホロンバイルにおける遊牧民定住化の過程を説明する図式とみることも出来る。だが、この発展図式が無理なく適合するのは、トングスの場合だけかも知れない。既述の通り、陳巴爾虎旗のトングスは1918～30年に、故地のザバイカル地方から着の身着の儘で陳巴爾虎モンゴルの夏営地へ転がり込んだ避難民である。僅かでもラクダや牛を連れて来れた者は、幸運だったという。従って、当初は大半が草原の動物を狩って飢えを凌ぐ漂泊生活を余儀なくされたらしい。哈吉ガチャの一隅には、その当時を偲ばせる半地下式の仮小屋を今なお見ることが出来る。彼らは故地においてロシア文化とロシア語に親しんでいた関係で、当地でも

ロシア人入植者に雇われる者が多く、例えばセラフィム老は、その折りにロシア式草刈り鎌の「リトフカ」にも習熟されたそうである。やがて、蓄えて家畜を購入できた者から、再び遊牧生活へ戻っていった。

ところで、トングスがザバイカル在住時には「草刈り」を行っていたことが推定される。インフォーマントの話では、そのところが今一つはつきりしないが、彼らが強い影響を蒙ったブリヤートとロシアの両文化は、既述のように、「草刈り」の文化であるから、状況証拠は存在する。この問題は、いずれ文献資料で究明する所存であるが、この推定がもしも正しいとするなら、ホロンバイルへ移った彼らが「草刈り」を重視しなかったのは、なぜかという疑問が生ずる。これまた推論で申し訳ないけれども、理由は二つ考えられる。まず彼らには、他人の夏営地に割り込んだことに対する遠慮があったのではなからうか。事実、陳巴爾虎モンゴルとトングスの間には牧地をめぐる対立があり、定住化政策を進める政府の仲介によって、漸く決着をみたといわれる。紛争の種は極力回避するのが賢明であつたろう。次には、さらに本質的な理由として、ホロンバイルの牧草資源の豊かさが指摘されねばならぬ。遊牧生活者にとっては越冬飼料が不要、と語る巴媼やアレクセイ老の話を想起されたい。これは、飼育する家畜の頭数が一定数（その数は掌握できていないが）を越えぬ限り、冬季も牧草は確保できる、と翻訳することも可能であろう。彼らの所有する家畜が当初は僅かだったことは、既述の通りである。やがて、トングスの牧畜は時とともに発展し、上記の発展図式によるなら、今や大半の経営主体が第3段階にある。但し、第2段階を経るのがその常道であるか否かは、今後さらに検討を要する。

一方、ソロンの場合に具体的情報で確認できたのは、第2、第3の両段階のみである。第1段階をここで論理的に想定することは、もとより可能であるし、かかる段階を踏んで牧畜を発展させた事例も、現実にはあった筈だが、果たして3段階の発展図式がソロンにとって典型的と言えるかどうか

か、設問せざるを得ない。そしてその際は、必然的に、積み残してきた難題と取り組まねばならない。即ち、ホロンバイルでは「草刈り」が、いつ、いかにして開始されたかという問題である。

これは、2世紀半に及ぶソロンの牧畜文化史に関わる問題だけに、正面から取り組むだけの用意が私にはない。今ここで可能なのは、関連する既知の情報を整理した上で、大胆に推論を重ねること位である。その検証については、今後に予定している調査・研究の結果に待ちたい。

まず第一に、ホロンバイルへ移住する以前のソロンが、草刈りを実践していたかどうか、問題にしてみよう。興安嶺東南麓、現在の布特哈（これは満州語で「狩猟」を意味する）旗近辺に在住時のソロンは、乏しい史料によると、基本的に狩猟民であった。従って、草刈りとは無縁であったと考えるのが自然であろう。しかしながら、当地で交流のあったダウル、満州文化にもしも草刈りが存在したとするなら、少なくとも家畜の飼料として草を刈ることは、ソロンも承知していたかも知れない。さらに言えば、草刈りを実践したソロンがいた可能性すら考えることもできる。だが、この当時のダウル、満州のいずれかに草刈りの事実がなかったかどうか、中国の専門家に質した限りでは、反応は概ね否定的であった。

次なる問題は、ソロンが草刈りを開始した時期であるが、前段を踏まえるならば、ホロンバイル渡来時、もしくはその後ということになる。輝ソムの達老によれば、その時期は前者で、しかもそれが草刈りを行わないモンゴルとの対比で語られている。因みに言えば、つい先頃まで、ホロンバイルのモンゴルは草刈りを嫌い、それ故に実践もしなかったそうである。してみると、草枯れの年に結ばれるソロンとモンゴルの互酬契約の慣習が、却ってモンゴルの草刈り拒否を背後から支えてきたとも考えられ、両者の協力関係、即ち、ソロンの草刈り開始は相当古くに遡らせねばなるまい。従って、当面は、ソロンがホロンバイルに到着した時ないしはその後間もなくに草刈りを始めた、としておこう。

最後には、草刈りがいかにして開始されたかが問題となる。これには幾通りかの答え方がありうるが、まずは借用か自力開発かを検討する。ソロンの「草刈り」複合は、漢式の鎌といい、また乾燥させるための半球状堆積といい、いずれも定住農耕民文化を継承する要素が濃厚で、狩猟民ないし牧畜民文化を偲ばせるものは極めて希薄である。かかる諸要素が当初から備わっていたかどうかは問題だが、今回ホロンバイルからの帰路、海拉爾から南下する列車の車窓に展開した秋の風景は、精粗の別はあれ、点在する半球状堆積の連続であり、現状に関する限り、ソロンの牧民から漢族の農民に至るまでの文化の均質性を強く印象づけられた。「草刈り」複合は次第に出来上がってゆくものだから、ソロンが独自に開発した要素も当然に含む訳だが、複合全体としては外来物、恐らくはグウルか満州を介しての漢族文化(?)の借用という印象が強い。

但し、草刈りがどのような経緯で開始されたかの話になると、事情は些か違ってくる。ホロンバイル草原へ移駐された狩猟民ソロンが、清朝から家畜の供与を受けて牧畜生活に踏み出した時、手本としたのはモンゴルの牧畜文化であった。ソロンの牧畜用語が基本的にモンゴル語であるのは、そのことを如実に物語っている。しかしソロンは、その際に、モンゴル文化を丸ごとコピーしたのではなくて、現地の生態系に適合した新基軸をも打ち出している。その最右翼に位置するのが草刈りである。本来的に遊牧民であるモンゴルが牧草の豊富なホロンバイルでは草刈り拒否を貫いたのに対して、前身が狩猟民のソロンは豊富な牧草に着目して、何の拘りもなくこれを刈り貯めする道を開拓したのである。この意味では、ソロンの草刈りも自力開発とすることができる。しかしながら草刈りの開始は、ひょっとすると、清朝がソロンに与えた指令の中に含まれていたのかも知れない。これはほんの思い付きに過ぎないが、同じ遊牧民でも草刈りを実践して定住性を高めた集団の方が、駐防の兵士としてはもっと頼り甲斐がある筈で、清朝は意図的に移駐の兵の過半をソロンから選び、しかも彼らをロシアに

接する辺境に貼り付けたのではないか、と考えられるからである。だがそれはともかくとして、ソロンの草刈りが、このように環境へ適応する形で、移駐の当初から開始されたとすると、前述のトングスの草刈り開始時と同様の条件は、ソロンにも備わっていたように思われる。してみると、「草刈り」に関する３段階発展図式はソロンにも適合することになる。

牧草に余り恵まれない内蒙古で調査された梅棹忠夫氏の前記の報告によると、内蒙古草原のモンゴルも 1940 年代の前半には、かなりの集団が既に「草刈り」を実践し始めており、いわば第 1 段階に突入した訳である。ホロンバイルのモンゴルでは、やや遅れて同様の動きが見られたようである。しかるにソロンは、その頃には総体として既に第 2 段階から第 3 段階の初頭にあった。このような発展段階における較差の淵源を尋ねてみるに、下記の 3 項目に辿り着く結果となったが、果たして如何なものであろうか。

(1) ホロンバイルの生態的条件

ソロンの早い時期における草刈りの開始は、ホロンバイル草原の豊富な牧草資源なしには起こり得なかった。従って、同様の条件を備えぬ内蒙古の草原では、恐らく、別個の発展図式が成立しているものと思われる。

(2) 民族の伝統的行動様式の相違

同じ生態条件の下にあっても、遊牧民のモンゴルと狩猟民出身のソロンでは「草刈り」に対する反応が異なっていた。トングスは、ソロンとは歴史的条件をやや異にするも、ホロンバイルに到着するや、驚くべき速度でソロンと同一の発展図式を辿って行った。

(3) 歴史的状況

一義的には、ソロンが清朝によってホロンバイルに移駐された事実がすべての発端である。しかし、これに加えて、ソロンを取り巻く政治・社会的条件と歴史・文化的情况が、ソロンの「草刈り」にこのような発展のプロセスを採らせたのである。言うなれば、これも「満族文化の周辺諸民族に及ぼした影響」の一態である。

〔資料〕

以下に資料として掲げるのは、江上波夫著『満州国ニ於ケル諸民族ノ状況ト目下重要ナル民族問題』（B5版、84ページ、東京刊、出版年度の記載なし）からの摘録である。この刊行物は、著者（江上氏は当時、「民族研究所」の第二部所員）が1943年に実施した中国東北部（当時の満州国）における民族問題の視察・研究に基づく報告の一部を、第5章として表記の題名のもとに謄写印刷したものである。これは「満州族」、「ツングース族」、「蒙古族」といった原住民族の3節、および渡来民族として別建ての「漢族」、「朝鮮族」、「日本民族」、「白系露人」、「ブリアート族」の5節で構成されるが、今回は第二節「ツングース族」より、拙稿に直接関わる＜オロチョン＞（5～11ページ）と＜ソロン＞（15～18ページ）の2項のみを転載する。

そもそもこの報告書は、唯一活字印刷されている表表紙の右上に㊟と明記され、その見返しには「民族研究所」の名でく・・・ソノ取扱ヒニツキ慎重ナル注意ヲ希望シ特ニ持廻リ閲覧等ハ差シ控ヘラレタシ。>と記した注意書が貼付されていて、部内秘扱いの極秘文書だったことが窺える。奥付はない。この㊟文書は現在、保谷市にある民族学振興会の図書室に複数部収蔵されている（分類番号 222. 5/18/C）。表表紙の右脇を見ると、＜極秘（朱印） 51 民族研究所資料 C-I — 岩村（？ 朱の押印）>と記した縦長の黄変した紙片が貼りつけてあり、これがかつては「民族研究所」の所蔵であったことが判る。按ずるに、「民族研究所」の閉鎖に伴って蔵書が民族学振興会へ移管された際、これらの㊟文書も保谷に移されたものと思われる。因みに言えば、転載への同意を頂くために著者の江上氏とお会いした折りに、同氏はこの報告書を未見といわれ、保谷に所蔵の事実を御存知ではなかった。執筆者ですらその所在を確認しておられない幻の文書であるから、これはその一事をもってしても公刊に値すると考えられる。

しかしながら、幻の江上報告書の一部をここに収録する趣旨は、寧ろ、これが蔵する情報価値を江湖に広めんとするところに存する。その評価については、以下の摘録部分を一読の上、読者各位において下して頂きたい。私としてはただ、江上氏が足を使って収集された中国北方諸民族に関する情報が、今となっては得難い歴史記録になっている

事実だけを指摘しておきたい。敢えて言うなら、江上報告書は類書も多い中で出色の民族誌なのである。江上氏の当時の研究活動並びに執筆の姿勢が国策に奉仕する志向を有することは明らかであり、私はこの点に関して批判的見解を持するものであるが、氏の研究成果に対する私の評価は上記の通りである。従って、刊行計画が進行中と聞く『江上波夫著作集』には、是非ともその全文を収録されるよう要望する次第である。

謄写印刷の原文は漢字混じり縦書の片仮名文だが、片仮名表記が慣用の事例を除いては、読み易さを考慮し、私の責任において平仮名表記へ改めた。また、仮名遣いは原文の儘であるが、句読点の判別は私が行なった。ただ、手書きの文字の解読で大きな過ちを犯してはいないかと密かに懼れるものである。なお、明らかな誤植と判断される6文字[本文中、該当文字に下線を施した]だけは、やはり私の責任において、次のように訂正しておいた[六世→六姓、姓河→姓何、博茶→礮茶、災害→災害、エウエ^レキ→エウエ^ンキ、拵する→擁する]。乞指正。

末筆ながら、御玉稿の転載を快諾して下さった江上波夫氏に対して、衷心よりお礼を申し上げる次第である。

a. オロチョン

オロチョンはその所有する家畜の種類により、馬オロチョンと馴鹿オロチョンに大別され、前者は黒河省、興安東省、興安北省に跨る大興安嶺山中に広く散在し、後者は漠河、伊吉奇山間、主として黒河、興安北省両省境の山地に散居す。従ってオロチョンの居住区域はその広^(マ)、殆ど朝鮮半島に匹敵するも、彼等の人口は2750、戸数685(康德8年調)に過ぎず、大海に於ける漁船の如く、彼等は広大な大興安嶺山中に漂泊しつつ狩猟生活を営むものなり。而してそのうち馴鹿オロチョンは僅か300人に足らざるなり。

彼等は興安嶺山中に多く棲息する鹿、麇、ハンダカン、山猫、栗鼠等を狩猟しつつ、同山脈中の諸河川を中心として、その天幕を移動しつつあり。かくて各主要河川毎に一群団をなし、^{チョール}綽爾河を中心とせるもの(チョール

チェン・オロチョン), 呼馬爾^{クマール}河流域のもの(クマルチェン・オロチョン), 根河^{ガン}上流のもの(ガンチェン・オロチョン), 畢拉爾^{ベラル}河を中心とせるもの(ベラルチェン・オロチョン), 海拉爾^{ハイラル}河上流のもの(ハイラルチェン・オロチョン)等あり。各群団は更に數個乃至十數個の小集團に分れ, それが夫々の河川の谷間を夏は多く上流に向ひ, 冬は比較的下流に移り, 一年間に大体その流域の山谷を不規則なる楕円を描き一周しつつ, 一定の谷間を獵場として生活す。この小集團は多く一群の親族より成り, 之れに若干の狩獵仲間その他の親密なる隣人を加へたるものにして, 必しも氏族の異同を問わず。即ちそれは親族を中心とせる地縁的隣人集團に他ならざるも, 同時に共同的狩獵集團なり。而してこの小集團は普通5個乃至10個位の天幕より成り, 団員の選舉せる頭目^{ムクンダ}により統率され, 自治を行ひ, 緊密なる結合を維持しつつ, 己が獵場内を1・2ヶ月または2・3ヶ月の間隔を置き移動しつつあり。天幕の成員は普通3・4人乃至5・6人にして, 多くは2世代の
みより成るも, 頻々3世代の成員を含むものあり。

一方オロチョンには, バヤギル, カルタギルの唯二つの氏族^{ムクン}のみあって, 支那流には前者を姓白, 後者を姓何と呼び, 両氏族世々互に通婚し, 自^{オソ}から彼等は二重組織の氏族社会を形成せり。尤もこの両氏族は夫々五姓(トガバイル, ボイチャイルチェン, ボンバイル, デョロンチェン, ア・チャイル)と六姓(ナタンチェン, コンゲタチェン, トガアルタギル, ボンカルタギル, チャルバンカ, チャチャギル)の小氏族に現在分化せるも, 同氏族より出でたる小氏族間の結婚は禁ぜられ, 結局族外婚単位として, バヤギル(姓白), カルタギル(姓何)の両氏族あるに過ぎず, 各氏族は氏族集会(ベラル^{マ・}ルチェン・オロチョン語にて「コウセルヂ」と謂ひ, 論議すと云う原義を有す由)を催し, 曾ては族員相互の親睦, 義務負担の決定, 簡易なる裁判, 官命の伝達等を行ひたるも, 今日においてはそれ等の機能多くは前記の小集團に移り, 元來は氏族長の名称なる「ムクンダ」も今や小集團の頭目のそれに変ぜり。然れども各氏族が夫々特有の神^{スドリツト}を有し, 夫々

専属のシャマンを以て、氏族の祭祀を行ふことは従前通りにして、その際、他氏族出身の婦人（妻）は他氏族の神^{スピリット}を保持するものとして除外さる。この点は同じくツングースなるも前述の満洲族の氏族社会の場合と正反対なりとす。

一方オロチョンは、満洲国建国前、軍事政治的には海拉爾（呼倫貝爾）の所謂蒙古衙門の支配を受け、光緒 19 年以来呼倫貝爾協領の下に 2 佐^{ソム}に分たれ、2 佐領に驍騎校を置きたるが、現在は佐を細分して 22 佐とし、氏族の長老、世襲のシャマン、狩猟の名手等、オロチョン社会の有力者をジャンギン（佐領）、ハーフン（驍騎校）、ボスコー（領催）等に任命し、日系の指導官が之れを指導しつつあり。1 佐の天幕数平均 35、人員数 130 人にして、これが現在オロチョンに於ける政治軍事的単位をなせり。

要するにオロチョンの社会は狩猟及び生活の単位として小集団あり、結婚及び祭祀の単位としては氏族あり、政治及び軍事の単位として佐ありて、この 3 単位により三重に構成せられ、結局全体が一の纏りたるオロチョンの共同生活体を形成するものと認めらる。

オロチョンは全く狩猟のみによりて生活するものとして、また氏族長、集団長、家長等がすべて男子なるを以て、生産者として、統率者としての男子の位置は女子より遥かに高し。また長幼の序が一般に厳格にて、15 歳位迄は只管服従と訓練との時期にして、尚ほ 25 歳位までは極めて違慮勝ちな態度を持し、長上の前にて自由に会話することも許されざるも、25 歳を過ぐれば、社会は之れに対し完全なる一人のオロチョンの地位を認めて、50 歳位迄の間が彼等の最も得意なる、而かも責任の重き活躍の時期なり。而して 50 歳を過ぐれば間もなく老境陰退^{マ・イ}の生活に入るもの多し。即ち狩猟民社会に常に見るところの、実力あるものの活躍期間における尊重の風がオロチョンの場合に於いても顕著に認めらるるものの如し。

彼等は興安大嶺中の山谷を騎乗して、苟くも獣類の足跡を発見するや、その獣の種類、居処の方向、等を立所に判定し、何処までも執念深く追跡

して一撃の下に之れを討取ると云ひ、オロチョンが原始林中の獣の通路を熟知せること、獣の習性に通曉せること、遠目の利くこと、百発百中なること等は真に驚嘆に値するものありと云ふ。かくて彼等は狩猟生活の冒険と、歓喜と忍苦に一生を捧ぐるものにして、然かも近年は山林の開発、露人移民団の入山等の為に、彼等の狩猟場が年々侵蝕され、獲物が益々減少し、断えざる生活難に直面しつつ、往々餓死するものすらあり。之れ満洲国に於ける目下重要な問題の一なりとす。

そもそも彼等の人口が最近著しく減少しつつあるは疑いなき事実にして、民国 20 年（昭和 6 年）満洲事変の年、オロチョンの総戸数 872、人口 3520 ありしものが、康德 5 年（昭和 13 年）満洲帝国治安部調査班の実地踏査によれば、戸数 671、人口 2867 にて、更に同 8 年（昭和 16 年）の調査によれば、戸数 685、人口 2750 にして、僅か十年間に、770 人、総人口の 22%、三年間に、117 人、4%強も激減しつつあり。恐らく現在は 2600 人位に減少せるものと認めらる。而して斯くの如きオロチョンの人口激減の主要原因として、次の如きものが考慮に値すべし。

- （一）山林の開発、露人の拓植——例へば黒龍江沿岸、三河地方の如き——等による獵場の縮小、それに伴ふ獲物の減少、即ち収入の減少。
- （二）山中互市により彼等と物々交換すべく入山する漢人商人、ダホール商人の奸詐による、粟、塩、磚茶、阿片等彼等の生活必需品の不当な高値、それに依る彼等の借金の増加と栄養不良化。
- （三）阿片の常用、その結果なる心身の耗弱と経済生活の貧窮。
- （四）近時他民族との比較的頻繁な接触による種々なる伝染病の流行。
- （五）小規模なる二重氏族組織の社会に於ける配偶選択範囲の狭少と、不相応なる経済的負担による結婚の困難。

要するに、経済生活の逼迫による栄養の不良化、阿片の常用、伝染病の流行による心身の耗弱と貧窮の倍加、結婚の困難による人口自然増加の減

少、等がオロチョンの人口激減原因の主要なるものと思われ、満洲国に於いても既に之れが対策を講じつつあり。即ち彼等の収入たる狩猟の獲物とその生活必需品とを正常に交換せしむるため満洲畜産株式会社を指定し、以て漢人商人、ダホール商人等の奸商の活躍する余地なからしめ、彼等の経済的負担を軽減し、その生活の向上を計りつつあり。また彼等に警備、運搬、漁撈、薬草採集、粗放なる農業等適當なる副業を与へんとし、且つ医者を派し、薬品を給して、その厚生にも努力せんと計画中なり。而して阿片に就きては、その吸飲者を登録せしめ、満畜をして適量を之れに売与せしめつつあり。かくて阿片の災害より漸次オロチョンを救済する方針なり。また銃器、火薬、彈丸等は役所より之れを供給し、その使用及び管理に就き監督を加へつつあり。然れども斯くの如き微穩なる方法により、彼等の人口激減の趨勢を喰止め得るや否やは頗る疑問にして、遙かに徹底せる、積極的な救済法を彼等に対し至急実施する必要なきや。之れ目下重要なる民族問題の一なりとす。

既に一言せる如くオロチョンの居住区域はその広袤、殆ど朝鮮半島に匹敵し、然かもその位置は満洲国の最北部として、シベリヤに突出す。さればこの地域の対蘇作戰上に於ける重要性は攻防共に頗る大なるものあり。而してこの地域は興安嶺の原始林に覆はれ、諸河川錯雜して、地理に精通せるオロチョンの協力なくば作戰殆ど不可能なるべし。ここに於いてオロチョンの激減は、満洲国の防衛、大東亜共榮圏の確立上由々しき大事にして、速刻之れが対策を樹立実施すべき要あり。

最後に馴鹿オロチョンに就き一言すれば、彼等は馴鹿を飼養する關係上、その飼料たる蘇苔類の生ずる現住地域を離れ得ぬが、然かもこの地域と雖も必しも馴鹿の牧地として好適ならず。依りて彼等は頻々馴鹿を失ひ、アムール州及びヤクーツク州居住のツングースより之れを購入したることあり。現在の如く蘇滿国境の自由なる通過が不可能なる時代にありては、彼等の馴鹿飼養も弥々困難となること予想せざるべからず。彼等の経済生活

は馴鹿の利用により半狩獵半牧畜の性質を有し、長年に亙る露西亞人との接触により、希臘正教を信仰し、露語を解するもの多し。従って彼等は馬オロチョンと生活文化の点に於いて相当相違し、僅か二・三百人足らずと雖も、對蘇作戰に於ける防諜、諜報關係に於いて特に注目すべきものあり。彼等が露西亞人を最も信賴し、これに親愛の情を懷き、一方我が日本人に未だ充分親しまざる所以も、その民族生活に根ざすことを理解せざるべからず。彼等に対する適切な指導も、滿洲國に於ける目下重要な民族問題の一なるべし。

c. ソロン

ソロンは「エウェンキ」と自称する如く、北方ツングースの一種族にして、興安北省、同東省、龍江省に散在す。その人口総数は不明なるも、その大部分は興安北省の^{ソロン}索倫旗、同東省の阿榮旗に住し、索倫旗東西^{ストフ}牧地に在るもの528戸、2359人(康德5年現在)、阿榮旗に在るもの約1000人と云はる。彼等はその住地の自然的条件と經濟的事情に顯著に影響され、興安北省の住民は同方面の蒙古族と同じく、殆ど全く遊牧に従事し、興安東省の住民は同地方のグホールと同様、半農半獵の生活を営み、龍江省(嫩江沿岸)の住民は漢人と雜居しつつ完全なる農民と化せり。また興安嶺山中には殆ど純粹の狩獵民たるソロンもなほ多少遺存すと云ふ。

索倫旗のソロンは各家族移動式包^{バオ}を有して遊牧に従事し、多数の家畜を擁するものは1週間位、家畜の少きものも1ヶ月足らずして2・3里離れた場所に移動し行き、一年を以て夫々一定したる放牧地を一循環し、一年の終には必ず最初の地点に戻ると云ふ。斯く彼等は遊牧を行ふも、冬季の為には乾草貯蔵の慣習を有し、之れが普遍的に実行されつつあり。また牛2・3頭、馬1頭位を有する中流以下のソロン家族の男子は乾草刈、牛糞拾、伐木、車大工、家畜の見張り、狩獵等の副業を為し、女子は山羊皮の冬靴作り、牛乳搾り等の内職を行ひ、以て生計を助くるもの多し。これ等の点

が牧畜以外殆ど如何なる生業も為さざる蒙古遊牧民と稍々顯著に相違せり。

ソロンの家族は家長たる父親の存命中は原則として分家せずして、両親及び兄弟の家族が同一の包内に生活す。而して家族の人員増加し、一個の包内に同居するには余りに多人数となれる場合に止むなく別居することあるも、然かもこの際は必ず親の包の近くに住むことを以て常例とせり。父親が如何に老齡となり、その長子が壯年を過ぐるも、前者は死ぬ迄、家長としての絶対権を保有し、彼死するも、母親生存中は、彼女が家長権を継ぎ、両親とも死亡して後、始めて長男が家長となり、財産を相続する慣習なり。但し父母の生前においても、その息子兄弟の仲が非常に悪く、或は兄弟の内に不具者ある場合には、財産（家畜）の分配を行ふことありと云ふ。蓋し仲悪き兄弟は父母の死後財産争を為すこと必然にして、また不具者の場合は財産分配より除外さるる恐れあればなり。この場合の財産分配法は均分法にて、親の分と兄弟夫々の分に均分し両親の死亡後、親の分は末子に与へらるるを以て常とするものなり。而して財産分配と同時に別居する如き場合には、末子が両親と共に住み、兄達が別居する慣習にて、ここに末子相続の遺風を見るべし。

ソロンの家庭に於いては、妻子は主人に絶対服従し、全家族は家長の命に従ひ、長上に対し頗る嚴格なる礼儀あり。婦人は馬に乗りて家畜の見張をなす如き——之れは蒙古族婦人にとりては日常のことなり——野外の活動をなさず、専ら家庭内の仕事を勤めるのみ。また殆ど離婚のことなく、主人死するも子供ある場合には、主家にありてその子の養育に一生を捧げ、再婚を好まずと云ふ。かかるソロン族に於ける謂はば武士的気風と慣習は、彼等が元来男性中心の狩獵民の出身にして、また早く満洲朝に帰服し、その満洲統一の諸征戦に参加し驍勇を謳はれたる伝統の然らしめし処なるべし。彼等は擁正年間、居住地たる興安東省より北省に移駐し、ダホール、バルガ蒙古族等と共に呼倫貝爾副都統に属し、その索倫旗左右兩翼を形成

せり。爾來彼等は勇猛果敢を以て知られ、頗る団結力に富みしが、無知無学にして、政治的手腕無く、常に海拉爾ダホールの大官に利用され、他方バルガ蒙古族等よりは、「ホラガイ」（蒙古語にて泥棒の意）と謂はれて敬遠されたり。蓋し彼等が他族より家畜を掠奪し来ることを以て、少々常習となせるに依るなり。

ソロンの氏族制に就きては、未だ確實なる報告皆無なるも、興安嶺山中のソロンの狩獵民間には最近まで氏族集会ありて、^{モフンダ}氏族長その議長となり、氏族全体の政治軍事関係の問題、氏族員間の結婚、財産問題、或は鬭争問題等が討議解決され、その際この氏族集会に参加し得るものは成年以上の氏族員全部にして、但し婦人の参加は許されず、家長たる寡婦の代理として亡夫の兄弟、若しくはその近親の男子が出席せりと云ふ。

ソロンの結婚制は氏族を単位とせる外婚制に相違なきも、未だそれに関する報告なく、唯彼等が一夫一婦制を原則とし、男14・5歳、女18・9歳にて普通結婚し、異種族との通婚を好まず、然かも實際問題としてはソロン族内に適当なる配偶を選ぶこと仲々困難にして、ダホール、オルト等と雑婚するもの少なからずと云ふ。

次に興安東省阿榮旗のソロンに就き一言すれば、彼等は早くよりダホールと共に定着し、阿榮河の中流域に居住して、狩獵を行ふと共に原始的な農耕（漫撒子）を営みつつありしも、近年その土地の大部分を漢人に買収され頗る困窮せるを以て、建国後旗公署に於いて之れが救済策を講じ、新にソロンの集団部落を建設せしめ、その部落単位に土地、農具、種子等を貸付け、共同農場を経営せしめたり。而して同農場よりの生産物の配分は集団部落民に対し均等分配を原則とす。

要するに、ソロンは興安嶺東西麓の諸地域に分在し、その住民の自然的条件と經濟的事情により、夫々生産様式を異にせるも、概して環境に対する適応性あり。且つ同族の団結力強く、他種族の間にありて、よく種族的特性を保持し、單純にして質実剛健なる武士的氣風を伝へたり。従つて彼

等は今日なほ無知文盲と雖も、之れを善導教育することにより、満洲国に於ける最も信頼すべき、且つ勇敢なる軍人、警官を養成することを得べし。